「小崎道雄所蔵資料」についての紹介と解説

Introductory Remarks on the Documents
in the Possession of Michio Kosaki

原　　誠
Makoto Hara

1.　はじめに、資料の由来

この資料は、1975年に霊南坂教会から寄託され、以来土肥昭夫神学部教授（当時）の研究室に保管されていたもので、土肥先生のご退職後は神学部研究室に保存され、今回、データベース化が行れたものである。

この資料が土肥先生の研究室に搬入され、以来、保管されるようになった経緯と事情を以下に説明する。

霊南坂教会は、同志社第1回卒業生の一人であった小崎弘道が1879年に新肴町教会を設立したことを起点とする。以来、90余年を過ぎて、霊南坂教会としては1979年に創立100年を迎えることになり、これに関した諸行事の準備を始めた。そしてその事業の一つとして「100年史」の刊行が決定された。当時の霊南坂教会の講壇の下は、いわば半地下の構造で、ここに大量の資料が保存されていた。そのために土肥先生は霊南坂教会の求めに応じて、この講壇の下の倉庫をほこりにまみれて、数日をかけて資料の整理と分類をなされた。

これらの膨大な資料は、おおよそふたつに大別できた。ひとつは、霊南坂教会固有の資料であり、他のひとつは、創立牧師である小崎弘道に関するものを含んで、父弘道のあとをついで長く主任牧師として働いた小崎道雄個人のものであり、いわば小崎家に関する資料である。

これらの資料のうち、前者の資料を用いて当時の霊南坂教会の府上征三牧師が中心となって100年史の執筆が始められ、1979年に総ページ743ページという膨大な『霊南坂教会百年史』となって創立記念式典に間に合って出版された。

霊南坂教会では、創立100周年の諸行事を終え、さらに新会堂の改築を控え、これらの資料の保管と整理について協議した結果、同志社大学人文科学研究所にその整理

を依頼することとなった。同志社大学人文科学研究所ではこれらの資料を寄託文書として受け入れ、1980年以来18年の歳月を費やして整理が続けられた。そして1433点にのぼるこれらの資料は、1998年に同志社大学人文科学研究所から『霊南坂教会文書目録』となって出版されてその作業が終了した。

もうひとつの小崎家に関する資料は、大型のダンボール6ケースに納められて土肥先生の研究室に搬入された。いささか私事にわたるが、当時、筆者は大学院博士課程前期の学生であり、指導教授である土肥先生の指示によって1年間にわたって、これらの資料の基礎的整理を行った。資料は後述するように小崎道雄が関わった幅広い分野に及んでおり、おそらくは静夫人の手によって、おおむね2～3カ月分ごとに綴じ紐で束ねられて保存されていた。これを筆者は、たとえば組合教会関係、日本基督教団の総会関係、教務会関係、常議委員会関係、出版局関係、東亜局関係などに分類し、大型封筒に鉛筆書きでタイトルを付して、日時を記入して整理するという方法で整理した。

これらふたつに大別される資料について、筆者は、いささかの感慨を禁じえない。当時大学院の学生であった筆者は、大学院在学中に「小崎道雄所蔵資料」の整理をし、1978年に卒業して、その霊南坂教会に伝道師として赴任した。創立100年を翌年に控えた霊南坂教会は通常の教会活動を継続しながら、すでに100周年記念事業が開始されており、その多忙ななかで平行して土肥先生によって整理された資料をもとに府上征三牧師を中心にして「100年史」の執筆が進められていた。そして100周年の記念事業のすべてが終了し、『霊南坂教会百年史』が出版された後、教会ではこれらの資料の今後の保存、整理が課題となった。そこで筆者が同志社大学で親しく師事していた人文科学研究所の杉井六郎教授を頼って整理を依頼することを提案し、これが了承されて人文科学研究所に整理を寄託することになったのである。

他方、「小崎道雄所蔵資料」はその後土肥先生の研究室で保管され、土肥先生はこれらの資料を駆使して研究を進められ、それらが1997年に出版が開始された『日本基督教団史資料集』（第1巻～第4巻）、その他に結実した。

1997年3月に、土肥昭夫教授は同志社大学でのお働きを終えて定年退職され、これらの資料の保管は筆者に委ねられた。筆者は1994年に神学部に移り、1998年度の同志社大学学術奨励研究費ですでに一時的な整理を終えていたこれらの資料のデータベース化を進めたのである。データベース化には当時の中山花子や枝光泉ら大学院生が協力した。

つまり、筆者はこの両方の資料に関与したのである。

2. 同志社と小崎家について

同志社と小崎家とは歴史的に深い関係がある。ここでは詳細にわたって言及するつもりはないが、小崎家は同志社、同志社大学神学部、日本組合基督教会、そして日本基督教団、NCC、WCCと深い関わりを持った日本キリスト教史上、非常に希有な一家である。

同志社大学には、上記の2種類の膨大な資料の他にすでに同志社大学人文科学研究所に同志社第1回卒業生の一人であり、新島襄亡き後の同志社第2代社長となった小崎弘道の『自筆集』が寄贈されており、また1995年に小崎家に保存されていた明治期以来の写真がすべて寄贈され、神学部図書室ではこれを複写して2セット保存している。

3. 小崎道雄について

小崎道雄については、すでに土肥昭夫教授が『小崎道雄の行動とその論理』（1972年）で明らかにしている。詳細はそれにゆずるとして、ここでは「小崎道雄所蔵資料」との関係についてのみ簡単に述べる。

小崎道雄は、小崎弘道・千代の長男として1888年に生まれ、麻布中学を卒業後、1912年に渡米し、オベリン大学、コロンビア大学、イェール大学で学んで22年に帰国し、直ちに日本組合基督教会霊南坂教会の伝道師となり、24年に按手礼を受けて副牧師となった。31年に父の後を受けて主任牧師となり、以来の生涯を組合教会のみならず日本を代表する教会のひとつである霊南坂教会の牧師として活躍した。その活動の範囲は文字通り幅広いものであった。霊南坂教会の主任牧師となったころから日本基督教聯盟に関わり、太平洋戦争開戦の直前には、阿部義宗、賀川豊彦、河井道子、斉藤惣一らとともに遣米平和使節団の一員として渡米した。41年の日本基督教団創立に際しては統理者代理に選ばれ、戦時中には出版局長、東亜局長を歴任するなど、教団の行政の中枢にあって、その運営に深く関わった。彼は、統理者制が廃止された戦後翌年の46年の第3回教団総会で総会議長に選ばれ、以来54年までその任にあった。また48年に発足した日本基督教協議会（NCC）の議長に選ばれ、59年まで国内、国外のキリスト教各派の提携、協力を推進した。また1948年に結成された世界教会協議会（WCC）にも当初から日本のキリスト教界を代表して関わりをもった。

このように多彩な活動に関与した人物は日本のキリスト教界でも多くはなく、小崎道雄はその意味では希有な例といってよい。

4. 「小崎道雄所蔵資料」の内容

すでに述べたように小崎道雄が関与した範囲は、日本国内におけるキリスト教界の活動にとどまらず広く、そして長期にわたって海外にも及んだ。ここでは、これら多方面にわたる小崎道雄が関与した結果として、小崎静夫人の手によって集積された資料の概要を示す。

資料の件数は全体で、約1200余りである。項目を以下に列記する。

日本組合基督教会に関しては、「総会」、「理事会」、「綜務部」など。また「北海部会」、「関東部会」、そしてこれらの「幹事会」に関するもの。

日本基督教聯盟に関しては、「総会」、「総幹事」、「常議員会」、「綜務部」、「教育部」、「各委員会の活動」、「皇紀2600年奉祝全国信徒大会」、「宗教団体法関連」、「教会合同準備委員会」に関するもの。

日本基督教団の成立以後、戦時下については、「総会」、「統理者」、「常任常議員会」、「教務会」、「総務局」、「伝道局」、「日曜学校局」、「教育局」、「財務局」、「婦人事業局」、「厚生局」、「出版局」、「東亜局」、「法制委員会」、「教師検定委員会」、「財務監査委員会」、「神学校設立委員会」、「西部神学校設立委員会」、「信条委員会」、「調整評議委員会」、「人事委員会」、「審判委員会」、「基督教報国団・戦時報国会」に関するものである。

また戦時下にカトリック教会との間の協議機関として機能した「日本基督教聯合会」に関するものや、宗教団体法に関連して文部省や他宗教団体との関係をもった「宗教団体戦時中央委員会」のものもある。

戦後についても、宗教団体法の廃止に伴って教団は組織改変を行ったが、小崎道雄自身が教団総会議長に就任したことによって「新日本建設基督教運動」の資料を含めて、戦後の教団の活動範囲のすべてに関わる資料が含まれている。

すでに述べたように1948年に成立した日本基督教連盟に関しても同様に、関係する資料があり、連合軍の占領下にあった時代については、占領軍を含む行政文書を含んでいる。

また国内のキリスト教関係団体については、「内外協力会」、「日本聖書協会」、「日曜学校協会」、「YMCA」、「中日文化連絡会」、「日本基督教文化協会」、「雲柱会」などの資料もある。

これらに加えてWCC関係のおびただしい資料と、当然のことながら、一部霊南坂教会に関する資料の他に、小崎道雄自身の「説教」の原稿や「書簡」も含んでおり、わずかではあるが小崎弘道の「説教」の原稿や「書簡」も含んでいる。

これらの資料の歴史的意義について少しコメントすると、もちろん他に保存されていない、例えば東亜局に関するものなど第一級の資料もあるが、多くが会議や集会の

案内や出欠に関するものであったり配布された資料であったりして、直ちに直接的に何かを解明するために重要な一次資料ばかりというわけではない。しかし、これだけまとまっている個人所蔵にかかる資料は他に例を見ないといってよい。

一言付言すれば、小崎道雄の孫に当たる小崎真氏（現、桜美林大学）は、この資料の内、戦時下の教団の「東亜局」に関する資料を用いて修士論文を提出した。

5. いくつかの資料の紹介と解説

すでに述べたように、土肥先生を中心に進められ日本基督教団宣教研究所教団史料編纂室から出版された『日本基督教団史資料集』（第1～4巻）は、戦前から戦後の日本基督教団に関する基本的な資料を収録している。

ここでは限られた紙面で、このような『資料集』に収録されることがなかった資料をいくつか紹介し、解説する。

（1）戦時下において、教団は日本海軍が軍政を敷いたインドネシアに宗教宣撫班として宣教師を派遣した。この南方派遣宣教師についてそれを準備し一切のアレンジを行ったのが、当時、新生教会の牧師であった白戸八郎であった。彼は教団成立時には第10部に属することになった日本独立基督教会同盟会の代表として教団に関わり、教団創立時には参与、常議員であった。教団は文部省からの要請を受けて1943年4月の教務会で彼を予備的調査のためにインドネシアに派遣した。ここには白戸八郎がインドネシアに出発する際に関係者に出した挨拶の葉書がある。以下に紹介する。

「謹啓　昔オレブ山の驢馬の子は主の御用により意外な役割を演じたと云う話が残っています。今回不肖○○の要望と日本基督教団の推薦により、計らずも重要任務を委嘱せられ、不日遠い南の国に参ることになりました。

顧みれば驢馬にも劣る駄馬では御座いますが、総動員の今日もう一度若返って、東亜建設の御事業に参加させて頂きます。伝道者に適はしい御用なので微力ながら一生懸命やって見る積もりで御座います。日頃みづくかばね草むす屍と歌ひ続けてきた私共、よしや何事が起らうと何の不足も御座いません。参上御挨拶申上げたいのは山々で御座いますが、何分にも早急の御用命、此の儀不悪おゆるしください（以下略）

昭和18年5月17日

新生教会主管者　白戸 八郎」

白戸八郎は、日本軍政下のインドネシアの各地の教会を1年間調査して帰国し、教団の教師20名を選抜して送り出した。詳細は、拙稿「日本基督教団南方派遣宣教師とインドネシアの教会」『基督教研究』（第56巻第1号、1994年12月）を参照のこと。

（2）また同じ1943年11月8日から11日まで開催された教団の婦人事業局が行った「婦人教師、指導者練成会」のプログラムがある。会場は女子会館で約70名の出席で、費用は2000円との小崎の書き込みがある。

内容は、以下の通りである。

8日

8時、集合登録、参拝。10時、開会式、式辞 教団統理者、祝辞 阿原局長

1時、国体ノ本義（5時まで）、7時、教団関係座談会、教団統理者、総務局長

9日

8時、日本基督教団ノ聖書理解 渡辺善太氏、1時、日本基督教団教学問題 熊野義孝氏

7時、婦人事業局関係問題座談会

10日

8時、日本基督教団ノ聖書理解 村田四郎氏、1時、教学座談会 渡辺、村田、熊野

7時、婦人教師養成問題座談会

11日

8時、日本精神史 村岡典嗣、　　1時、時局講話 報道部員、

閉会式 式辞 教団統理者」

これまで各地で教師練成会が実施されたのは知られている。土肥先生は、『日本基督教団史資料』（第2巻）の、戦時下の教団の諸活動に関する「解題」のなかで、以下のように述べている。「教団戦時事務局主催の教師練成会は、しばしば開かれた。（中略）43年になると、練成会は戦時事務局のみならず、矯風会、青年会、女子青年会、日曜学校局、婦人伝道局、諸教区の主催で開かれた」（227ページ）。

このように、全教会をあげて、あらゆる局面で「練成会」が企画され、実施された。そのような一連の動きの中で、婦人教師を対象にした「練成会」も行われたのである。他になされた「教師練成会」とほぼ同一のプログラムで、講師や講演内容もほぼ同一であったことがわかる。文部省の阿原局長の祝辞を受け、「国体ノ本義」に関する講演がなされ、様々な教派の歴史的背景をもった教会理解、聖書理解を、宗教団体法のもとにある一つの教会としてのアイデンティティにまとめあげようとするプログラムであることは明瞭であり、それを婦人教師にも認識させ、またこれら婦人教師を各教会において教会婦人の指導者として練成しようとしたものである。

（3）戦後間もない1946年に出されたガリ版刷り、5枚の資料がある。表題は「幌向（ホロムイ）（北海道）キリスト村建設計画」とある。

本文の最初には「財団法人賀川財団及日本基督教団ノ責任ト計画ニ於テ外地引揚ノキリスト者ヲ以テ北海道空知郡幌向原野ニキリスト村ヲ建設ス」とある。

以下、建設予定地、買上地、収容戸数、収容者ノ資格、事業、経費、経営着手、な

どについて項目ごとに記されている。

予定地については、夕張川放水路があり、南側は石狩川に面して土地改良は「驚異的ニ良土化シツツアリ」とある。

収容戸数は、第一期、約40戸、第二期、約70戸、第三期、約90戸、とされ、資格は「外地引揚農家及復員者、内地戦災者ニシテキリスト教信者又ハキリスト教関係者トス」とある。

事業は、「キリスト村協同組合ヲ設立シキリスト教団ヲ中心トシテ行政経済ヲ組織スル」とある。

この活動がどのように進展しそして消滅したかについては、現在、資料が手元にないので言及のしようがないが、この時代の状況とそのなかにおける賀川豊彦の非常に強い影響力と指導力を垣間見る思いである。

6. 最後に

以上簡単ではあるが、「小崎道雄所蔵資料」の紹介と解題を行った。これらはすでに記したように、1998年度同志社大学学術奨励研究費を受けて資料のデータベース化が進められた。記して謝意を表する。